

Rebooting Structure: Zensō Thought

構造の再起動：前層思想



Ryuji Moriyama

<https://ryujimoriyama.art/>

モダニズムは作品の内部構造を削ぎ落とした。

ポストモダンでは構造そのものを放棄した。

AI は生成プロセスを消去し、結論を量産する。

目次

第1章：構造の再起動 —— 前層思想の必然性

1. モダニズムの限界
2. ポストモダンの限界
3. AIによる結論の均質化
4. なぜ前層が必要になったのか
5. 構造の再起動とは何か
6. 前層とは何か
7. 作品との関係
8. 第1章の結論

第2章：前層の生成力学 —— 中心・生成・構造

1. 中心の発生 —— 視覚を起動する最初の揺れ
2. 運動としての生成 —— 往復運動が生む知覚の時間構造
3. 構造の再起動 —— 絵画に必要な働き

第3章：制作プロセスと時間

1. 知覚と身体の循環 —— 現象との対話
2. 運動の増幅と構造の生成 —— 変化への即応

第4章：中心の変遷（1987–2024）

- 4.1 Broken Book（1987）
- 4.2 Teien（1991）
- 4.3 On the Rock（1992）
- 4.4 Mirror（1994）
- 4.5 Green and Blue（1996）
- 4.6 yb（2003）
- 4.7 Hanakana（2018）
- 4.8 Mikana–Hakana（2019）
- 4.9 Yume no Shikisaihen（2023）
- 4.10 Session No.4（2024）

第5章：おわりに

第1章：構造の再起動

前層思想の必然性

1. モダニズムの限界

構造を“結果”としての形式でしか見なかったため、構造が生まれる“過程”が見えなくなった。モダニズムは形式の純粹化を推し進めるあまり、作品の内側の構造が削られ、消し去られ、最終的にただの「物」に行き着いてしまったのである。

2. ポストモダンの限界

ポストモダンもモダニズムが作品内側の構造を扱えなくなってしまったことを受け、構造そのものを扱わず、言語・物語、文脈へと根拠を外側に求め構造を見つめることから逃げた。その為 視覚の内部構造（OS）が消滅した。

3. AIによる結論の均質化

AIは多量の経験済みのデータから導き出される。視覚が「結論の量産」に閉じ込められ、人間固有の揺らぎが消去されつつある。

4. なぜ前層が必要になったのか

モダニズムは形式の純化を推し進めて、構造をなくし物質に帰結した。ポストモダンは中心そのものを否定したため、そもそも構造を見ようとしなかった。AIは結論だけを効率よく取り出しプロセスを消去する。どれも「視覚がどのように生まれるのか」という問いが欠落したまま残され、人間の視覚の問題を扱うことが出来なかった。私はこの欠落を埋めるために、視覚が画面に触れた瞬間に起こる揺れと生成の状態を **前層（Zensō）** と名づけた。そして視覚法則が収束し、像がひとつの構造として安定する状態を **後層（Kōsō）** と呼んでいる。

5. 構造の再起動とは何か

画面が固定して構造が消滅してしまったあとに構造を立ち上げる運動。

6. 前層とは何か

前層と後層は、絵画の中に物理的に存在する層ではなく、作品を見る人間の視覚の中に起こる現象。**視覚が絵画を読み取る時に通過する時間構造**である。前層とは、画面が揺れているのではなく、視覚がまだ収束せず、複数の可能性のあいだを揺れ動いている 知覚の状態 である。

7. 作品との関係

作品とは単なる静的な物体ではなく、視覚の動的なプロセスを画面上に現出させる場である。そこに 中心・生成・構造の再起動が画面に現れる。モダニズムとの違いはモダニズムがあくまで作品の形式、物質性を見ているのに対し、本思想は作品と人間の間で起こる現象を見ようとするものである。

8. 第一章の結論

構造の再起動は前層思想の中心であり、AI以後の視覚において不可欠な新しい構造となり得る

第2章：前層の生成力学

一体としての中心・生成・構造

私の制作において、中心・生成・構造とは別々の要素ではない。観者の視覚が画面に触れた瞬間に、それらは一体となって同時に動き出す。このひとつの連動した動きこそが、「前層」という時間構造である。

1. 中心の発生 —— 視覚を起動する最初の揺れ

中心を探究するうちに、視覚法則が自然に生む「収束する中心」と、生成を起動する「起動点としての中心」が同時にあることに気付く。

中心が二重化し、収束と反収束が拮抗することで、画面は緊張と揺れを持続する。この状態を前層と呼ぶ。

また、物理的に2つの中心を配置することや、重心からズレた位置に中心を置くことは、中心が持つ強力な収束力（像としての固定化）に対する「遅延」の役割を担っている。

オールオーバーの作品は中心のない均一な画面であり、そこで生まれる差異は滲みや色あい、テクスチャーなど 素材そのものの揺れである。

前層の揺れは、素材ではなく生成プロセスそのものの揺れである。

中心の発生とは、画面上に形態を描くことそのものではなく、その形態が視覚を起動させる瞬間に生まれる“最初の揺れ（起動点）”である。

前層思想における中心は、視覚の内部構造（OS）を駆動させる **最初の揺れ＝生成点** として現れる。

2. 運動としての生成 —— 往復運動が生む知覚の時間構造

中心から放たれた運動は、画面全体の色や線と響き合い、即座に中心へと跳ね返る。この **往復運動そのものが生成** であり、画面を完成された「静止した結論」として閉じさせない **知覚の時間構造（前層）** を生み出す。

生成とは、形態を増やすことではなく、視覚がまだ収束せず、複数の可能性のあいだを揺れ続ける状態そのものを指す。

3. 構造の再起動 —— 絵画に必要な働き

「視覚がどのように生まれるのか」という問いは「絵とは何であるか」という問いではなく「絵は如何にして生まれるか」という問いである。

私の作品において「中心・生成・構造」が一体となって駆動するとき、視覚は結論へと収束するのではなく、視覚が「意味のある像として理解する」前の状態に留まり続ける。

この一体となった駆動の中に、モダニズム以降の絵画における「構造の再起動」が発生し得る。

私はこの構造を、制作の現場で探り続けている。

構造とは固定された骨組みではなく、中心と生成の往復運動によってそのつど立ち現れる生き生きとした状態なのである。

3章：制作プロセスと時間

形が立ち上がる前の時間には、判断と反復だけが静かに積み重なっている。

1. 知覚と身体の循環 —— 現象との対話

制作の初期段階で、私は中心を点として置くことはしない。ただし、まったくの無方向から始めるわけでもない。どの領域に中心が“立ち上がり得るか”という大まかな方向性——候補域——だけを設定する。

この候補域は固定された位置ではなく、視覚と身体の応答の中で揺れ続ける“幅”である。実際の中心は、この幅の内部で、画面に起きる現象との往復の中からその都度発生する。出発点にあるのは、画面に起きる現象を眺め、判断し、身体でそれに関わることである。関わったことによって生じた変化を再び見つめ、また判断して身体を動かす。この「眺める・判断する・行為する」という絶え間ないフィードバックの繰り返しの中で、やがて画面に「中心」が立ち現れる。

2. 運動の増幅と構造の生成 —— 変化への即応

中心が現れると、画面の変化は一気に速度と大きさを増す。

中心は収束を促すと同時に、次の起動点にもなり得る。私は「まとめたいという欲求」と「生き生きした運動を生み出したいという欲求」二つの間の葛藤の中で制作する。その加速する変化に対応して、手を動かし、ふたたび判断と行為を繰り返す。あらかじめ用意された意味の為に絵の具を塗るのではない。画面と身体が互いに揺さぶり合い、緊張関係を高めていくそのプロセスの果てに、結果として「構造」が立ち上がるのである。

第4章：中心の変遷 (1987–2024)



Broken Book, 1987, 75 × 135.7 cm, Acrylic and paper

① 1987 『Broken Book (壊れた前層本)』—— 中心の萌芽

中心の四角が浸食されながらも、画面の要として立ち上がり始める。まだ不安定な中心が静かに生まれている。



Teien (庭園) , 1991, 63×48cm アクリル 紙に着彩 切り紙

② 1991 『*Teien* (庭園)』—— 単中心の確立

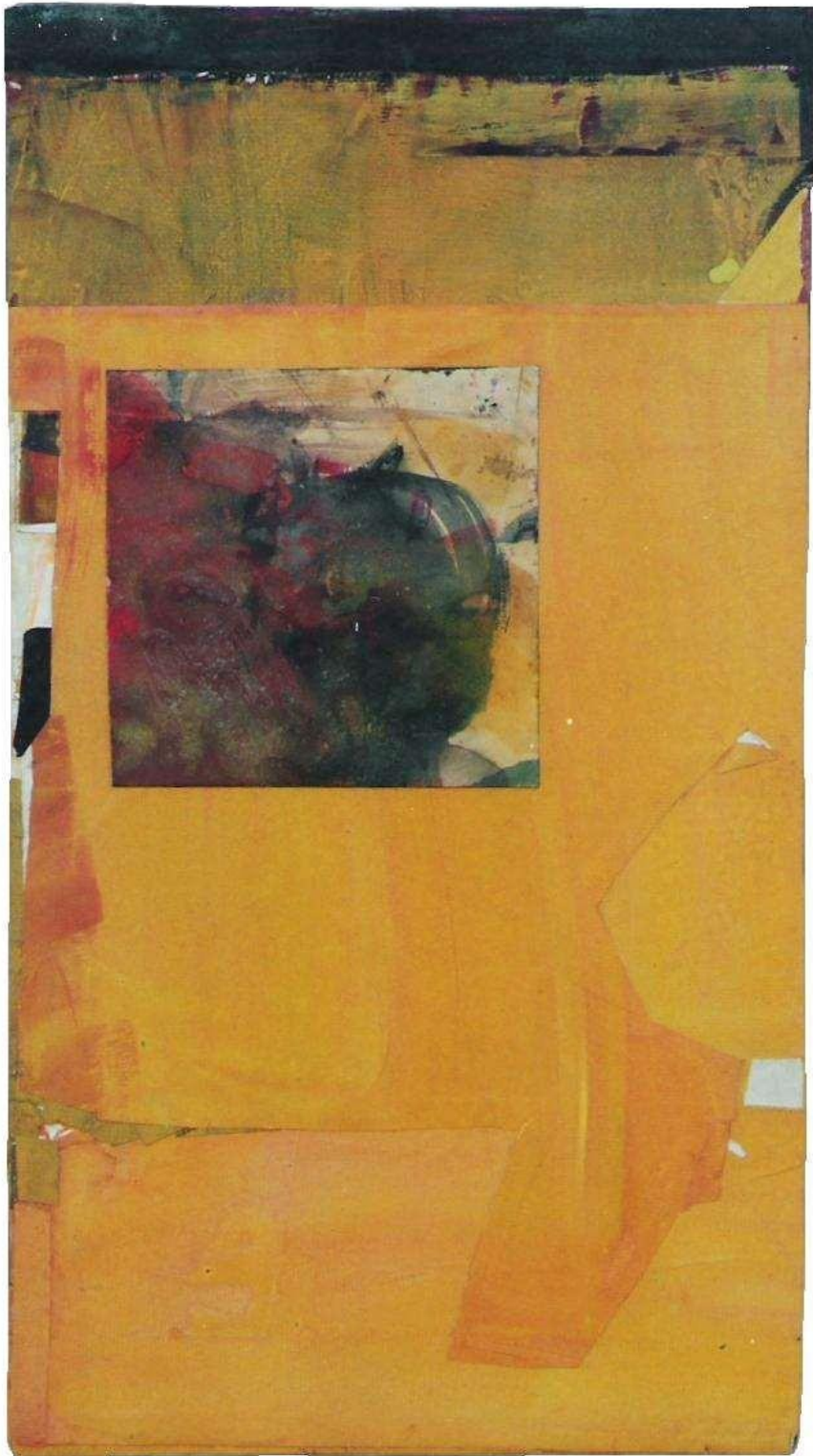
赤い四角は色彩的焦点であり、周囲との関係性を同時に構築する。中心が問いと答えを同時に担い始める。



On the rock (石の上), 1992, 63×46cm ミクストメディア

③ 1992 『On the Rock (石の上)』—— 多中心の誕生

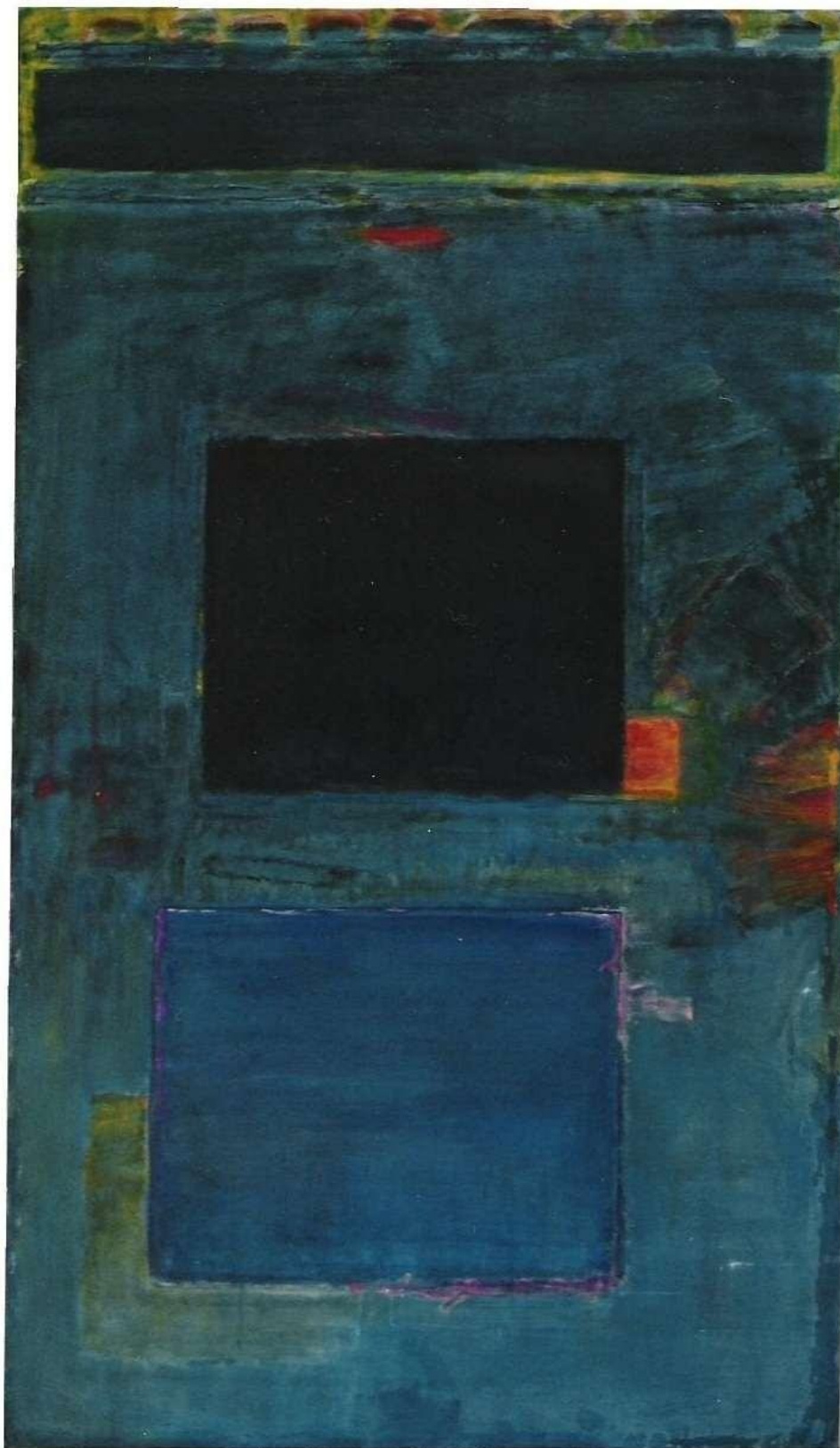
複数の中心が互いに干渉し、画面に複雑な構造と安定を生む。多中心が同時に立ち上がり始めている。



Mirror (鏡), 1994, 75x56cm アクリル,紙 ボード

④ 1994 『Mirror (鏡)』—— 中心の機能拡張

貼られた四角形が平面と奥行きを接続し、画面に“窓”を開く。中心が奥行きと構造の方向性を示し始める。



Green and Blue, 1996, 204×116cm acrylic on canvas

⑤ 1996 『Green and Blue』 —— 中心の空間化

浮遊する四角が画面の空間性を支える軸として働き始める。中心が空間の骨格を静かに形成している。



yb, 2003, 156×91cm キャンバスにアクリル パネル

⑥ 2003 『yb』 —— 中心の多機能化

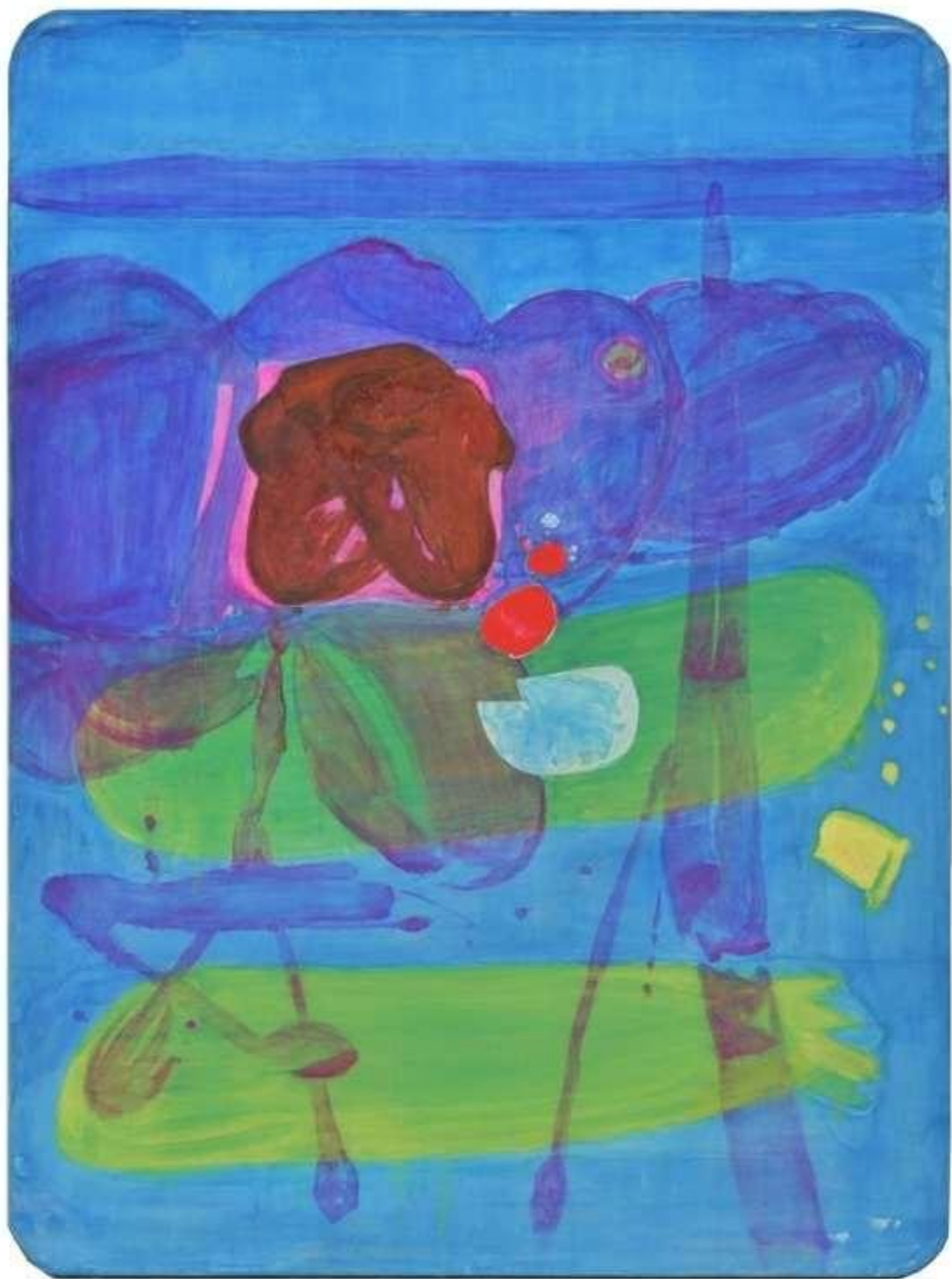
オレンジの四角が色彩・構成・変化の中心として複数の役割を担う。中心が画面全体の動きを導き始める。



Hanakana, 2018, 165.5x125.5cm アクリル、キャンバス

⑦ 2018 『Hanakana』—— 中心と有機性の結合

褐色の中心が有機的形態と結びつき、画面全体の呼吸を生む。中心が生命的な構造を導いている。



Mikana -Hakana, 2019, 173.5x130.5cm アクリル、キャンバス

⑧ 2019 『Mikana - Hakana』 —— 中心の複合化

ピンクと茶色の複合中心が色彩と形態を交差させ、複雑な構造を形成する。多中心が柔軟に干渉し合い、画面を豊かにする。



Yume no Shikisaihen (夢の色彩片), 2023, 10x26.2 cm アクリル、キャンバス 個人蔵

⑨ 2023 『Yume no Shikisaihen (夢の色彩片)』—— 色彩中心の拡散

褐色の四角と色彩片が二つの中心として拮抗し、色彩のアークを形成する。中心の概念が拡散し、構造を静かに導いている。



Session No.4, 2024, 73.5x51.7 acrylic canvas panel

⑩ 2024 『Session No.4』 —— 多中心構造の展開

黒い形と色片の複合体が強い中心となり、複数の中心が同時に拮抗する。多中心構造が画面全体を牽引している。

第5章：終わりに

構造の外側には多くの言葉があり、語りやすい。

その一方で、構造の内側——**視覚の働き**——は長いあいだ語られずにきた。

私は画家として、その内側を見つめてきた。

この内側の言葉が、ゆっくりと美術の現場にも広がっていけばと思う。

この内側には、**形態が生まれる前の“生成の時間”**がある。

Ryuji Moriyama

<https://ryujimoriyama.art/>